

排除と包摂の都市統治

フィリピン・マニラ貧困層地区の事例から

関恒樹(広島大学)

フィリピンはアジアの中でもっとも市民社会の活力のある国であるとしばしば指摘される。しかしながら市民社会的公共圏の概念は、往々にして、その公共性が排除する様々な他者 貧困層、先住民、ムスリムなど の存在を隠蔽する。むしろ近年のフィリピン社会において顕著になるのは、社会階層間のアイデンティティのせめぎ合いと拮抗、それを通じた差異化と断絶の深化である。特に近年ネオリベラルな統治性が浸透する都市空間においては、伝統的な階級・階層の細分化と分極化、さらに格差と不平等を伴った社会全般における個人化(individualization)が顕在化する。同時にそのような都市空間において顕著になるのは、特定の合理性を内面化した「市民」によるコミュニティの形成と、一方で「市民」として認められない人々の排除のプロセスである。本報告は、フィリピン・マニラ首都圏の都市貧困層地区の事例から、そのような排除と包摂を通じた都市統治のあり方を浮き彫りにし、ネオリベラルな都市空間の再編と人々の生活世界におけるハビトゥスの変容を明らかにする。

1 フェルナンド夫妻の「コミュニティ」統治

本発表では、フィリピンにおいて地方分権が進んだ1990年代初頭にマニラ首都圏マリキナ市の市長として登場したバヤニ・フェルナンド(在職期間1992-2001)とその後彼を継承した妻マリデス(同2001-2010)における地方行政と統治、その過程で生じた都市貧困層住民の生活空間の再編を検討する。バヤニ・フェルナンドは「良いコミュニティの形成」を標語にマリキナ市政に登場した。1990年代初頭にはマリキナ市の中心を流れるマリキナ川沿岸には多くの不法占拠者が居住し巨大なスラムを形成していた。そこへフェルナンドは「不法占拠者ゼロのコミュニティ」をその行政の目標として掲げ、「清潔」、「安全」、「健康」、「規律」、そして「自助」の精神に基づく「リトル・シンガポール」とも呼ばれる「コミュニティ」創出を目指したのであった。一方、現市長であるマリデスは「マリキナを一つの企業として経営する」と述べる。つまり、フェルナンド夫妻の行政は、優秀な企業の構成員としての高い生産性と市場価値を持つ住民によって構成される「コミュニティ」創出を目指すという意味で、フィリピンの地方行政におけるネオリベラルな展開を示す好事例であると考えられるのである。以下ではこのようなフェルナンド夫妻による統治の性格を示す2つの事例を検討する。

2 コミュニティ抵当事業(Community Mortgage Program, CMP)

「不法占拠者ゼロ」のマリキナを目指すフェルナンド市長は、従来のようなスラム住民の強制撤去にはならず、住民の「自助努力」による土地の取得を可能とする政策を積極的に推し進めた。それがここで検討する「コミュニティ抵当事業」である。この制度は、住民自身の自助努力と競争により合法的土地所有者を生み出し、彼らによるコミュニティを創出することを目的としていた。しかしながら、実際に住民間で生じていたのは、土地取得のための政府系金融機関からの借金を完済する能力を持つものと、そのような能力を持たないもの間に生じる一層の差異化と後者の周辺化であった。

3 行商人取締りの事例

調査地住民の主要な生業としては、サイドカーを取り付けた自転車による果物の行商、路上での販売である。フェルナンド市長は1993年にマリキナ地方政府内に「公共安全治安局」を設置し、これら路上の移動をとらなう行商を違法とし、その管理、取締りを強化した。その理由は、路上における公共の移動輸送手段の効率性の確保(渋滞の緩和など)と同時に、路上の美化と衛生の確保である。このような中で、行商人間に無力感が蔓延し、同時に彼らの地方政府、地方政治家への反感、不信が増幅してゆく。

4 結論

1992年以降マリキナの市長の座にあるフェルナンド夫妻は、環境を「美化」し、そして「健康的で」、「生産的な」市民を創出するという目標を掲げ、マリキナの統治を推し進めてきた。マリキナは、このような生産的で健全な「コミュニティ」創出を、その統治と開発の目標として掲げてきたが、2つの事例の検討から明らかになるように、皮肉にも現在地域で生じているのは、住民間の相互不信と確執、そして「市民」として認められない人々の排除である。本発表の事例は、特定の合理性、効率性、生産性を内面化した市民の創出・包摂と、その一方で非市民の排除という、今日の世界の諸地域において進行するネオリベラルな都市統治の事例として位置づけることが可能である。